

ジェイムズの真理観

根本的経験論とプラグマティズムの接点

鴨 川 実 生

はじめに

ウィリアム・ジェイムズ（一八四二—一九一〇）の存在は、哲学界よりもむしろ心理学界において重きをおかれている。彼は、それまで精神科学と呼ばれてきた心理学ではなく、「生理学的心理学」としての心理学を研究し、「意識の流れ」という、当時にあつてはユニークな学説をうちだした。ジェイムズは生物学や医学・心理学などの諸科学を研究したが、彼の興味はさらに宗教や神秘主義、哲学へと移行し、そして最終的には自ら「根本的経験論」と呼ぶところの独特な経験論を打ち立てるに至つたのである。

哲学界でのジェイムズは、プラグマティズムの創始者として知られているが、彼のプラグマティズムは一般的には、ジェイムズ自身が望んだようには理解されていまいというのが現状のようである。日本においてプラグマティズムは「実用主義」と訳され、「実用に役立つもの」を重要視しているのだと理解されるのが一般的なようだが、しかしジェイムズは決して「実用」だけを重視しているのではない。

周知の通り、プラグマティズムの代表といえば、パース、ジェイムズ、デュローイの三人であるが、この三人の思想家は三様のプラグマティズムを展開するのであつて、もとより「プラグマティズム」

と一括りにできる思想体系があるのではない。プラグマティズムはひとつの方法論であり、ひとつの方向である。

ジェイムズのプラグマティズムを正確に理解するためには、彼が自身の学説において最も重要かつ基本的であるとした「根本的経験論」を理解することが必要である。ジェイムズは「プラグマティズム」と「根本的経験論」を別々の、独立した学説であるとし、「ひとはそれ（根本的経験論）を拒否してもなおプラグマティストたることができるのである」と言う。そしてまた彼は、根本的経験論はプラグマティストではなくとも理解できると言う。しかしこの二つの学説には接点がある。その接点とは、ジェイムズの真理観である。彼の真理観を探っていくことによって、「ジェイムズのプラグマティズム」に対する一般的な見解が一面的なものでしかないということがわかってくるのではないか。この論文では、その点について述べたいと思う。

1 心理学研究期の真理観

ジェイムズが研究を始めた頃の心理学は、今日「精神科学 mental science」と呼ばれている。「精神科学」とは当時の呼び名に従えば「心の哲学 the philosophy of mind」であり、未だ哲学から分化されていなかったようである。

ジェイムズは「精神科学」から脱した「生理学的心理学」を研究し、一八九〇年に『心理学原理』を著した。その中で彼は、生理学的心理学の研究に、他の諸科学と同様「観察」と「分析」という方法を用いた。それは、具体的な心的現象の観察に始まり、それを分析して細かな問題へと細分化してゆくことで、「経験」の本質へ迫ろうとするものである。

彼は心理学を一自然科学として扱うことを強調する。このことには、心的事実はこれが認知する物的環境と切り離して研究することは適当ではないという意味が含まれる。

『心理学原理』の叙述の中から、ジェイムズが生物学者ダーウィンの『種の起源』（一八五九年）に大きな影響を受けていたことが読み取れる。ダーウィンの進化論における「自然淘汰説（自然選択説） evolution by natural selection」では、生物の形態や性質は、長い世代交代の「生存闘争（生存競争） the struggle for existence」の過程において、より生存するために有利な、つまり生きる環境への適応に有利な変異をした種が、自然に淘汰され進化して遺伝を続けてきたものであり、現在の生物種は「有利な変異の生き残り」の結果であるといわれる。

ジェイムズはこの説に影響を受け、人間の情動・本能、さらには「考え・意識・知識」などの「内的諸能力」もまた、身体的能力とともに生存闘争のための道具として〈世界〉に順応（adapted）するように進化してきたものである、と考えた。

内的諸能力は「〈世界〉の真つ只中であって、われわれの安全と繁栄を確保するように」生存闘争の道具として、身体的形質とともに自然淘汰され進化してきたのであり、環境あるいは〈世界〉に適合したもののなのである。このような見解から導出されるのは、人間の心的生活はもともと有目的であるという結論である。人間の意識活動は、〈世界〉に対する、より有利な反応を形成するうえで〈役立つ〉から現在の状態になっているのであって、その根本的な意義は「自己保存活動」である。

このように、内的諸能力が〈世界〉に順応しているとすれば、同じ〈世界〉の中であって人間がそこから導き出す「真理」もまた、人間に適合したものであるべきだし、そうでなくてはならない。すなわち「真理」は人間にとって〈役立つ〉のでなければならぬ。ジェイムズのこうした考え方が、「真理であるから有用であり、有用であるから真理である」というプラグマティズムの真理観につな

がるのである。

真理についてこのように考えると、それは非常に蓋然的であると考えざるをえない。それは有用でなくなればもはや真理ではなくなってしまうのであろうか。こうした点について、「根本的経験論」を見てみよう。

2 根本的経験論

ジェイムズの経験論を理解するうえで最も重要な点が二つある。一つ目は、精神を持つと同時に身体を持っている人間を「有機体」ととらえるという点である。人間も生物の一種であるから生存を続けていかねばならない。生存を前提とした〈世界〉に対する「興味」と、興味を道具として得た「経験」をどのように組み上げ「知識」へと構成してゆくか、このことが人間（という生物）を〈世界〉へ順応させるのである。人間の精神や知的能力といえども「生存」という問題を除いては本性を語れないのだという考え方は、『心理学原理』執筆期に既に芽生えていたものであるということは、前節に述べた。

もう一つの要点は、ジェイムズの経験論においては、「事実 *fact* を（認識（ひいては真理））の究極的原理 *ultimate principle* と見なす」ということである。この「事実」とは、我々が日常生活をしている中で経験する、様々な事柄のおこる現実の世界での「事実」のことである。経験論が根本的 *radical* であるためには、直接的に経験されない要素はその構造内にいれてはならず、また直接的に経験されるどんな要素も排除してはならない。それは、眼前に現れる全ての出来事を究極的原理と見なすということである。

このことは一見、非常に簡単なように思える。しかし特殊性を豊富に含み、常に生々しく具体的な「経験」は、考察される間に論理の中で凝縮され、その抽象、そのエッセンスだけが残ることになる。それはもはや個性や特殊性を排除された、概念および観念としての「経験」である。むしろ、ジェイムズにおいても一々の事実について説明するわけではないが、彼の考察の中心にあるのは「論理の体系」ではなく「経験そのもの」である。むしろ、経験とは何か、純粹経験とは、真理とは、と問うならば、それについて考えてゆくうえでは論理的思考に頼らざるをえないのだが、彼は論理というものに過度の信頼をおいてはいなかったのである。このことは、ジェイムズ思想を知る上で非常に重要なポイントである。

「経験論が根本的であるために」全ての事実を究極的原理と見なす方法とは、まだ知覚される以前の「世界」を原理とすることである。この「知覚される以前の「世界」」を、ジェイムズは「純粹経験 pure experience」と呼ぶ。純粹経験は、混沌としたままの直接的な生の流れ、言葉では言い表しがたい「あれ that」であり、単に世界が「現れている appear」だけの状態である（『現れる』という言葉が「主観の存在」を予期させてしまうのであれば、『ただそこに在る』と言い換えてもよい）。それはコギト以前のものだが、主観と客観、あるいは意識と事物は、本質的にはこの「最初の基本的な実在」である純粹経験から分化してくるゆえに、ともに等しく実在である。では、それはどのような分化されるのだろうか。

純粹経験が「知るもの」と「知られるもの」に分化するのは、ある一つの経験がどんな「文脈」に関係づけられるかということによる。純粹経験のある一単位が「意識的」になる、心的事実になる、あるいは知覚内容となるには、その一経験が、特定の意識の辿ってきた歴史あるいは文脈（心としての連続）に関係づけられ、古い経験の一連の文脈と新たな経験との間に起こった「関係」がその意

識内において「私有化」されなければならない。「私有化」するとは、一経験が〈文脈〉内の他の諸経験に「報じられ、知られる」関係におかれる、ということである。

ジェイムズは「存在としての意識 consciousness」を否定している。意識とは「存在」ではなく、純粹経験が概念化され、意味や名称を付加されて「あれ」から「何 what」になるための「機能」なのである。それは「経験の目撃者」であり、混沌とした純粹経験という「地」の中から「図」を切り出し意味を与える。経験は、意識がある対象の経験を「私有」している限りにおいて「意識的」といえるのである。それは単に〈在る〉ということの意味するのではなく、回顧され知られて在ること、そういう在り方を知っていることを意味する。回顧された経験は抽象化され記号化されて観念や概念となる。

純粹経験が物質（客観）として位置づけられるには、物理的文脈（物）としての連続）による。現実の世界にはいつでも結果が伴うので、物理的経験は「働きかけなければ変化しない」安定した部分」として固まり、物理的経験として経験されるようになる。

純粹経験は「心の状態」と（心によって）志向される *intend* 実在」という二役を演じる。ゆえに、重要なのはどの〈文脈〉において関係をもったかということであり、どういう経験が起ったかではない。〈文脈〉において関係づけられていない経験は純粹経験のままであり、主観でも客観でもない。意識に「現れる」ということを離れて「対象」を語ることはできないのである。

純粹経験が私有化され意識が世界を知るようにになると、（「あれ that」を「何 what」として）「知ること knowing」という機能は「知られるもの the known」に向かって私たちを誘導する。それは純粹経験という實在「に向かって誘導すること leading-towards」、そしてそこに「到達すること terminating-in」である。純粹経験からいったん抽象化され、記号化された観念ないし概念は、それ

ら「觀念ないし概念が意味する対象あるいは帰結」である純粹經驗の世界へ私たちを導くことによって、純粹經驗の流れのなかの「ある必要な一点」へと再び還歸させる。ただし、觀念や概念による誘導が、既に主觀と客觀とに分化された「世界」にしか私たちを到達させないならば、嚴密な意味での「純粹經驗への還歸」とは言えない。この「誘導」到達の過程において、私たちを「純粹經驗という實在そのもの」か、またはその周辺へと導く觀念ないし概念が「真」であると呼ばれうるのである、とジェイムズは説明している。

ゆえに、まだ主觀・客觀の区別をされていない純粹經驗からは「真理」の問題を提起することはできない。なぜなら、「真理とは思想と他の何ものかの間で行われる關係のひとつ」であり、思想とは「文脈」で決まる事柄でしかありえないからである。このようにして真理の問題について考えてくると、ジェイムズにおける「真理」は絶対的なものではないということがわかる。概念や觀念が、人間が「生きていく」上での興味や注意、あるいは利害などを内に含む「文脈」によって限定を受け、構成されてきたものであるならば、真理もまた同様にして、人間によって「構成された」ものである。真なる知識、真である概念は、はじめはドクサやひとつの可能性でしかなかったかもしれない。そうした諸概念などは、經驗という過程のなかで、検証と批判を重ねられて、純粹經驗という實在のより近くへと私たちを導くように「真理となつてゆく」のである。

3 プラグマティズムの真理觀

プラグマティズムにおいては、真理は恣意的であり、実用に役立てば良いのだから、非常に曖昧で独善的だという批判がある。しかしプラグマティズムにおいても他の哲学と同様に、真理の真理たる

由縁を「個人の恣意性」に任せきりにしてしまふわけではない。少なくとも、個人の恣意性や自由によってを委ねるとは言っていない。

経験の中で真理となるまでに高められてきた概念などは、私たちの行為や考え方の「信念 *beliefs*」となりうる。それは私たちを、「より正しい方向」へと導いてゆくものである。正しい方向へ導くとは、生物の一種であると同時に精神をもった人間、けっして物理的な満足（様々な身体的欲求の充足）だけでは満たされない人間を、生きてゆくためにより良い方向へ、純粹経験の世界の必要な一地点へと、向かわせることである。こうした意味で「真理は有用でなければならぬ」という真理観が生まれるのである。ゆえに「事実」はそれだけで真理なのではない。真理は、事実のなから構成されなければならぬのである。

プラグマティズムの真理論とジェイムズの根本的経験論とは、認識された観念あるいは概念が純粹経験という実在へ向けて私たちを誘導するという、この点において密接な関わりを持っている。この「認識」誘導説」こそは、ジェイムズの考える「真理」を説明するものである。「実在への還帰」が「最終的な真理の本質」であり、これを抜きにして真理を単なる「実利的満足」とのみ理解すること、つまり根本的経験論とプラグマティズムを切り離して理解することは、非常に誤解を招く。

私たちが所有しうる真理は大多数が検証されているとはいえない。しかしそれに依って生きているとすれば、周囲の状況から推定できる、あるいは「検証可能」と見なされうる蓋然的な真理も、やはり真理なのである。なぜなら、真ないし信念を持つことは生きてゆくために重要なことであり、ここでは真理は目的ではなく、身体的にしろ精神的にしろ、必須な満足を得るための予備的な手段に過ぎないからである。これまで真と見なされてきた概念が、後続する経験を補足しそれに一致するならば、その概念はより真へと高まり、より実在との一致に接近してゆくことによって実際にも知的にもさら

に満足感を高めてゆくことになる。ジェイムズはこのことを「真理の真理化・効力化 verification の過程」と呼ぶ。

真理は不動の性質をもつものではない。これがジェイムズの真理観である。それはいつか未来に改訂されうるか、あるいは挫折するかもしれない。プラグマティズムの「真理」は、合理論でいわれるような絶対的な真理ではなく、また経験から離れてそれと関わりを持たないというものでもないため、改訂される可能性がいつまでも残されることになる。しかしジェイムズの経験論においては、この「可能性」こそが強みなのであって、決して欠点ではない。なぜならば、人間の経験の未来に真理を改訂しうる「自由」と「かなた beyond」が存在すると信じつつづけることができるからである。「かなた」は経験的事実から派生してくる未来への可能性である。そして私たちは常にこの「かなた」に向かつて生きている。「かなた」は目標であり、要請であり、そして過去においても絶えず存在しつつづけてきたものとして、実際に経験されてきた。私たちは、今より善くなるかもしれないという希望を、抱きつつづけることができるのである。

まとめ——生の世界の哲学

ジェイムズは、論理というものを過度に信用すること嫌った。論理は事実全体の抽象でしかない。論理は人間の生活において不滅の用途をもっていると認めながらも、それだけでは決して事実の全体を説明することは不可能であるという。生の事実である純粹経験は「無定形な、不透明な、無媒介的な、外的な、非合理的な、無責任な例の怪物」であり、明晰な論理の透明性のなかに解消しきれるものではないのである。「實在、具体性、直接性など何といってもよいが、それはわれわれの論理を超

え、そこから溢れ出て、それを取り巻いているものである。」

ジェイムズの哲学の最大にして唯一のテーマは、有機体であり、体と心をもち、知性と感情を所有する「生身の人間」そして「生の世界」である。彼は哲学的思索と人間全体の結びつきを重視した。現前の経験（世界）から生まれてくる様々な問題を解く鍵は、この豊富過剰な生の世界に、充分に与えられていると彼は言う。そのための唯一の条件、これこそが根本的な方法であるのだが、それは「経験に何も足さず何も引かないこと」なのである。ジェイムズの哲学は、生の世界に端を発し、生の世界に帰結する。

ジェイムズの語り口には「体温」がある。それは生きているものだけが持つ温かさである。彼は自らの哲学を卑俗であると評したが、それに愛着を感じ、そして知恵を愛するという意味での哲学を、哲学者たちのもとから一般の人々の手に取り戻すことを願っていたのであった。

参考文献

- 『根本的経験論』 枘田啓三郎・加藤茂 訳／白水社（1978）
『心理学』上・下巻 今田寛 訳／岩波文庫（1993）
『プラグマティズム』 枘田啓三郎 訳／岩波文庫（1991）
『真理の意味』 岡島亀次郎 訳／世界大思想全書 春秋社（1931）
『新装版 アメリカ哲学』 鶴見俊輔 著／講談社学術文庫（1986）
『意識の構造』 加藤茂 著／青土社『現代思想』第六卷第十三号 所収（1978）